

ダブルケアに視点をおいた保育施設の働き

2017.11.20

江刺保育園 遠藤清賢

はじめに

ダブルケアとは介護と保育を一緒に行うことです。今後、主に家庭を持つ女性たちが自分の子や孫の保育と両親などの介護を行わなければならない状況が増えてくること
が予測されます。介護と保育を同時に行うようなケースをダブルケアと言い、その対応
に向け具体的にどのような制度や施設が必要なのか考えられています。今回のシンポジ
ュウムはこの分野を専門的に研究されている相馬直子先生を迎えダブルケアの実態と
今後の方向性を講演して頂き、介護や保育、実際にダブルケアを行っている方達のパネ
ルディスカッションが行われました。私は保育及び子育て支援分野のパネラーとして参
加し、この件について今後の保育施設としての方向性も示して頂きました。

介護と保育

介護も保育もその基本的な理念は同様であると思います。その精神は命を大切にす
るということであり、その働きは「如何に生きるのか」ということを伝えることです。伝
える対象が乳幼児と高齢者に違いがあるだけです。そして、それぞれの命を支えること
によってその精神は伝えられるのだと思います。保育は命を支え、命の働きについて、
人は如何に生きるのかを伝えます。介護は今の一時一時を大切に過ごし、命の終わりを
支えます。生きることも死を迎えることも命の働きです。この命を子どもたちと、また
高齢者と共有する働きが保育であり介護であると思います。

心の変化

人間の精神は大きく変化しました。その変化は残念ながら良い変化とは言えません。
特に人間関係が希薄になっています。その中で家族としての繋がりが弱くなっていると
感じています。それは命の誕生の瞬間、命の終わりの瞬間を家族が共有できない社会に
なっていることが一つの要因ではないかと思っています。家庭は人間の命の誕生と臨終
の場所ではなくなってしまうました。これが良いのか悪いのかは簡単に判断できませ
んが、家族としての繋がりは確実に希薄になっています。そして、子どもの成長を支える
家族の能力が失われつつあると感じています。命の誕生、保育、介護、臨終の見取り等
は保育園や介護施設、医療施設に委ねられています。命を守るためには致し方ない事な
のかもしれませんが、しかし、子どもを育てるためには「家族」、「家庭」は絶対に必要な
存在なのです。同時に死を迎えようとする方にとっても家庭や家族は大切な存在である
はずです。死を迎えるその時に、痛みがある場合は緩和医療が必要ですが、最も大切な
存在は家庭、家族の温もりであると思います。しかし、家庭は死を迎える場所ではなく

なっていました。今の世の中は死という出来事はあってはいけないことのように思われています。しかし、古代から誕生と死は日常の出来事でした。そして、人を愛する心、慈しむ心は死が運命づけられていることにより、命はこの上もなく大切に掛け替えない不思議な存在として育まれてきました。しかし、現代社会になって、徐々に死を受容する心が失われ、より長く生きることが人生において最も重要なことのように思われています。家庭で死をみとれば良いということではありません。人は死ぬことを排除せず、その死どのような心で迎えばよいのかと言うことです。自分は出来るだけ長く生きたいという思いではなく、自分の命は他の人たちの為に生かされているということを感じなければならぬということ。そのために自分も含めて命を大切にすることです。

家族、家庭の働きと能力

家族の働きは何かと言えば、具体的には衣食住の環境を共有する場所です。お互いに支え合う家族がいる場所です。子どもの立場に立てば信頼できる家族が存在し、安心して過ごすことの出来る場所、そのことを常時、確認できる環境であるということ。現代社会の中で家族の関係性が弱体化し、家族としての能力が失われている最大の課題は個々の家族が孤独に過ごしているということ。安心できる環境ではなく、寂しい空間であり、何も伝えられず、会話が出来ない場所になって来ているということ。満足な食事ができない家庭もあります。いつも叱られ緊張して過ごさなければならない家庭もあります。子どもがより良く成長するためには基本的信頼感と自己肯定感が絶対に必要です。家族から信頼されている、自分も何でも話ができ、その話を聴いてくれる、一緒に喜び、悲しんでくれる家族がいることによって、自分が大切にされているという無意識の感覚を獲得し、生まれてきてよかった、今がとても楽しいという思いが自然と湧き起こってくるのです。これが家族の能力だと思います。この家族によって子どもたちは命の大切さを知り、実際に大切に出来る人に成長することが期待できます。そして、命の誕生とその成長を支え、命の終わる人の命を支えることが出来るようになるのだと思います。

子育ての課題

子どもの育てることに於いて、孤独な子育て、児童虐待、貧困、食事など子どもたちを取り巻く多くの課題があります。これらの課題に対応する為に、また、子どもを育てることが大きな喜びであることを伝えるために「子育て支援事業」が行われています。特に孤独の中で子どもを育てている方たちが集まり、それぞれの御苦勞を共有し、保育することの喜びと大切さを考えて頂いています。日常の保育では子どもたちの日々の成長の様子を伝え、子どもと家族と共に新しい発見を喜び会うのです。子育ては本来、母親一人が担うのではなく家族全体で子どもの成長を支えてきましたが、核家族化によっ

て負担の全てを母親が被ってしまいました。これによって子育ては辛く、厳しい働きになってしまいました。家族にとって大きな負担になってしまったのです。当然少子化社会になってしまったのだと思います。保育園の重要性がますます大きくなったのです。これに介護の働きが加わったとしたら、その当事者はどうしたら良いのか途方に暮れてしまうのは当然のことです。

保育施設の働きは子どもたちの成長を支える為だけではなく、家族の課題も共有しなければならない時代になりました。家族からの相談を傾聴し、受容しています。子どもを育てる多くの課題に真正面から取り組んでいるのが保育施設なのです。保育園、幼稚園、認定こども園の指針が平成30年に改正されます。保育所保育指針に於いては子どもの保育の他に家庭支援の必要性が条文化されました。保育の重要な働きとして加えられたのです。

現状の課題

少子化や待機児童等の問題が声高に叫ばれていますが、それ以上に大きな問題は、弱体化した家族の関係性とその働き及び能力の喪失なのです。そのために子どもたちの命をささえる施設の働きを家庭に積極的に伝えなければいけません。そして、その働きが家族、家庭の再生に大きく貢献できることを願っています。保育や介護施設で働く者は自分自身の命の有り方を絶えず追求し続ける努力が求められます。そして、今生きていることを喜び、楽しむ者であるべきです。命が如何なるのものなのか、その命を持っていなければ子どもたちやお年寄りに何も伝えることは出来ないのです。

少子化によってその施設経営は保育だけでは難しくなると予測しています。特に定員100人以下の保育施設経営は非常に困難な時代になってくると思います。施設を存続するためには保育以外の公益活動を取り組まざるを得ない時代になると思います。現状では保育士が不足していますが、逆に保育士過剰の状況になってくるのではないかという予測もあるのです。余剰な保育士を施設だけに留めておくのではなく、より積極的に家庭の中に入り保育全般を対応できるような訪問保育制度が整備されるかもしれません。また介護と保育を行っている家族に対しての保育での支援がより積極的できめ細かな保育支援ができるようになると思います。

新たな働き

社会福祉法人法が改正され全ての社会福祉法人は定款に本業以外の無料または安価な利用料の社会福祉貢献活動を行う努力が求められます。私たちは無料の放課後児童受け入れ事業を今年度から始めました。その利用者の中に認知症になったご両親の見守りが必要になり、小学生である子どもとの関わり合いが困難なご家族がいました。とくにこのためと言うことで事業を行ったものではありませんが、微々たる働きですが、結果的にその家族を支援することが出来ました。実際、まだ小規模ですがお年寄りと幼児を

一緒にケアできる施設があります。ダブルケアの先がけ施設として頑張っています。社会福祉法人は要支援のお年寄りと乳幼児と一緒に利用できる施設を具体的に検討すべきだと思います。介護と保育の働きをしっかりと両立し、お互いに命の営みを確認できる場所が存在するということで、生きて成長する姿と、命を終息する為に一時ひと時を大切にすごしている姿をお互いに共有し、命を大切にすることを体験としてお互いに確認し、大切な命を育むことが出来るようになるのではないのでしょうか。失われた家族の交流が新たな形で構築できることは素晴らしいことだと思います。社会福祉法人は多様な事業が組み合わせられた複合施設としての機能が可能になると思います。複数の事業を行っている社会福祉法人が数多くありますが、一つの施設の中に複数の事業を組み合わせた施設は殆どないように思います。今後の社会福祉法人としての新しい働きに期待したいと思います。

ダブルケアにおいて施設としてどのような働きが必要なのか、ご苦労されている方たちは積極的に声をあげ、必要な働きを提案して頂きたいと思います。

もうすぐクリスマスです。クリスマスの喜びと神様のお恵みが多くの皆様に豊かにありますようにお祈りいたします。